

B-8 ある1人の患者さん急性期～慢性期の透析を経験して得られたこと

私は昨年4月に臨床工学技士として第三次救急病院に入職し、現在は主に透析室業務と心臓カテーテル業務を担当しています。そんな私が経験したところにジーンときた話をしようと思います。

私が集中治療室で透析を担当していた患者さんがいました。その方に初めて透析を行った際は、侵襲的人工呼吸器を装着しており、意識はあったものの、会話ができない状況でした。次第に状態が回復し、人工呼吸器から離脱し、会話ができるようになりました。開始後の点検のために訪室する度に、私に話しかけて下さり、他愛もない会話や透析についての質問をたくさん投げかけて下さりました。それまで私は意識のある患者さんの担当をすることの方が少なく、最初は対応に戸惑いました。しかし、不慣れながらも少しでも患者さんの精神的負担を軽減できるように努めました。やがてその方は集中治療室から病棟へ転棟し、透析室での維持透析が始まりました。その当時、私の担当は集中治療室の透析業務のみだったので、私はその患者さんに直接かかわる機会は無くなりました。

その1か月後、私は透析室業務担当になりました。そこでその患者さんの転院前最後の透析に携わる機会がありました。私からあいさつをしたところ、患者さんも私を覚えていて下さり、「集中治療室では不安でいっぱいだったから、鈴木さんが相手してくれて助かったよ、ありがとうね。」とだけ言っていました。技士人生で初めて患者さんから直接感謝のことばを受け取り、この職業への自信と誇りが芽生えました。

1人の患者さんの急性期から慢性期の透析に携わるという貴重な経験は、気持ちの余裕がなく、業務をこなすので精一杯だった私に患者さんと向き合うという1番大切なことを気づかせてくれました。業務に慣れてくると、作業化してしまいがちですが、この経験を活かし、常に患者さんの気持ちを汲み取り寄り添いながらこれからも業務に励んでいきたいです。